

書評

川勝 守著

明清貢納制と巨大都市連鎖

――長江と大運河――

森 永 恭 代

本書はこれまで江南地域を中心に独自の社會經濟史、近世中國の爆發的發展の構造を分析・研究してきた川勝氏の新たな境地を表したものである。前著『中國城郭都市社會史研究』を直接の前提研究とし、明清期に出現した巨大都市とその形成に大きく關わる長江・大運河流通の分析に主眼を置いている。

中國における一八世紀の人口爆發が象徴する、當時の社會經濟發展の原理を探る川勝氏の姿勢はこれまでと變わらない。だが本書の一番の特徴は序文にある次の点である。

「なぜ江南なのか」を「經濟發展の先進地域と位置づけたままで良かったのであるが、その地域經濟は全中國の經濟の中でどのくらいの位置と意味を持っていたかを測定すべきであった」。「地域と全體が構造的連關をもつて見事に活寫される」ことがのぞましい。

右記のように、これまでの江南デルタにこだわった川勝氏自身

の成果を相對化しつつ、中國全體との構造的關係をより深く探るべきであったとの反省が、本書全體に貫かれている。特に本書前半において、明朝の戸口把握の正確さを示し、各地で多角的に實施された貢納の實態を多數の地方志分析によって明らかにした所は、その意識がよく働いた結果と言えるだろう。

さて本書はB五判、本文七〇七頁に及ぶ大著である。構成はこれまでの江南デルタにおける研究を集約し本書内容の前提となる序章に始まり、前編全九章と後編全七章に分かれている。前編はすべて書き下ろしであり、後編は第二章と第七章が新稿で、他は既發表論文で構成されている。前編では明代の貢納制を様々な角度から取り上げ、その基本となる戸口統計と戸籍制度について戸口食鹽法等の分析を通して考察し、また各地に割り付けられた徭役や產物貢納、商稅の實態を地方志等から明らかにし、全國的な物流の様子と商品や資源の生産狀況を探る。後編では長江中流域以上に位置する西南中國を舞臺として、長江・大運河の物產流通に注目しつつ、清代乾隆期以降の問題となる雲南銅の京運を主に取り上げ、流域市鎮の發展に目を向ける。

次に各章について簡単に概要を述べる。

○序章 中國近世の經濟システムと都市網の形成

「唐宋期と明清期という二つの時期に起こった二回の商業革命を比較し、そこに窺える中國經濟の社會動態の構造的な特色を理解したうえに、それが一八世紀の人口爆發や都市化の進展にどのように関連したか、今日の中國經濟の歴史的な前提を考える」として、現在にも繋がる近世の社會經濟の構造の在り方をマクロ的に捉えることから始めている。

まず中國における二度の商業革命、特に明清期のその特色を示した上で、農業や手工業の發展と商品生産の展開、それらの中心的役割を果たした江南都市と社會について確認し、以後展開する諸論の大前提としている。

〈前編〉 明代貢納制と諸物産流通構造の展開

○ 第一章 明朝國家における人口・資源センサス

明朝における戸口調査は、洪武一四年（一三八一年）に太祖が詔して編纂された賦役黃冊がその最たる物であり里甲制の基礎となる。川勝氏曰く「明代は國家による戸口の把握が中國史上最も行き届いたと考えられる」という。そこで明太祖の進めた農業政策とその中で展開された戸籍制度とその問題點に焦點を當てるのが本章である。

明太祖によって洪武年間に實施された、元末戰亂による荒廢からの復興を含めた數々の農業振興政策のなかで、新たな土地開墾と人口移動策が展開され、それに伴って戸口數と田土面積は大幅に増加しその數値把握も非常に精度が高かった。このことを踏まえ、『明史』食貨志に見られる「逃戸」「移徙」といった特殊戸に注目し、太祖の政策の中でどのように關連するのかを述べる。そこには戸籍にあぶれてしまう人を無くし、賦役黃冊に全て集約し、戸口を把握することに務める様子が見られ、また國家の強制移住により人口再分配を強力に行つたことが理解される。

明初における國家の戸口と田土統計の把握は、太祖の重農政策に伴って非常に正確であつたことが改めて確認できる。太祖の方針は「祖宗の法」として明一代の基盤となるのである。

○ 第二章 明代鹽法の流通構造

本章はタイトルにあるように鹽法そのものではなく「官民に鹽を強制的に配給し、代價を納入させる」明代の戸口食鹽法の實施状況を、流通構造の觀點から分析するものである。

『明史』食貨志・鹽法の記述等から鹽官や各鹽場との關係、行鹽地方・鹽引額・官司の配置・各行鹽地方の戸口數等の數値データをまとめた上で、明初以降の行鹽地方の變遷や各管轄地でどれだけの鹽が販賣され人々に流通していたかを明らかにする。一種の課税とも見なされる戸口食鹽法が、各地で實際どのように施行されていたのか、配給される食鹽に對して銀・錢・鈔或いは米麥等の現物による代價の徴収がどう行われていたか、その規模と實績を、地方志の記述からより詳細なその實態に迫っている。また鹽政の事例を局地的に取り上げ、戸口食鹽の細かな支給實態を明らかにし、男女別戸口統計との關係や各地域での鹽法の展開に言及している。

鹽法に對する切り口を流通というキーワードにおいて、鹽販賣の對象となる各地の戸口數との對應を分析すれば、從來の單なる附加税という理解を超えて、鹽をめぐる全國規模の精巧な流通システムの存在が見えてくる。

○ 第三章 明代戸籍制度の地域的考察

明代の戸籍制度について検討するが、從來の研究のように里甲制度と絡めてその共同體としての機能役割や賦役徴収に注目するものではない。當時の戸口調査そのものに迫り、一般的な民戸或いは兵士としての軍戸以外に、匠戸・儒戸・醫戸等といった従事する職によって、或いは賦役負擔の關係から定義づけられ區別される、特殊な戸籍である諸色戸籍にスポットを當てている。

この諸色戸籍が各地方でどのように戸籍を編成されていたか、各地方志の戸口統計の記録から實態を明らかにしていく。その戸籍の種類や数、それによって示される賦役負擔のあり方に、各地の地理的文化的な傾向が現れているのがわかる。さらに特殊戸籍の中でもかつて「一般の軍・民・匠戸とは異なり、特殊な徭役に世襲的に服従した人戸」とされた雜役戸と呼ばれる存在に着目し、その地方志上の記述における扱いやその統計数を比較して、實態に即した定義を考察する。

諸色戸籍はこれまであまり議論されておらず、單に元の制度を踏襲した名残と思われてきた。しかし地方志の記述を見る限り明後期に至るまで各地の戸籍編成に影響を與えており、それはつまり諸色戸籍に對する賦役の負擔體系が、賦役制度改革を経ながらも存続していたことを示すのではないかとしている。

○ 第四章 明代匠戸制の地域的考察

第三章で取り上げた諸色戸籍の中から、その代表である匠戸にクローズアップする。これまで匠戸については、その一部分にしか注目が集らず、明代徭役制度の周縁部的存在として扱われてきた。これに對し前著の内容とも関連して、特に城郭建設に携わった匠戸に焦點を當て、その就役實態と各地の事例を検討している。具體的にはまず『皇明制書』洪武二年「諸司職掌」及び正徳『大明會典』に見られる匠戸の就役規定の記載をもとに、明初洪武期の規定を確認し以後どのように變化し匠役が展開されたかを示す。また地方志史料の記述を検討し、中央における規定と比較しつつ、末端の地方において匠戸制度がどのように機能していたかを探る。

○ 第五章 明前期、御用物品の流通構造——工部・内府関連事例をめぐって——

第四章に引き續き洪武「諸司職掌」と正徳『大明會典』を検討の対象として、國家や帝室の必要物品つまり御用物品が如何なる手續を経て調達されていたか、工部職掌の記述を元に考えるものである。物品の種類ごとに管理部局と處理狀況、物品の原材料の產地指定と數量等詳細に解説する。

明太祖による御用物品調達の基本的體制が、永樂帝の北京遷都によつて變更或いは補足されつつ、どのように展開していったかが一つの問題となる。明初から中期にかけて鐵や銅など金屬資源が從來の產地では枯渴傾向にあったこと、纖維製品については江南デルタを中心に繁榮したこと、そして北京遷都によつて大運河を利用した南北流通の發展が見られたこと等が明らかにされた。

○ 第六章 明代前期における歲進・歲辦上供の流通構造

民に對して通常の稅糧以外に特別な品目を指定して課され、皇帝或いは國家の上用に供する物品は、史料上では「歲進」「歲派」「歲辦」と稱されている。本章ではこの特別な上供品の中で祭祀・儀禮に必要とされた野味・皮張・翎毛を取り上げる。その產地指定についてやはり洪武「諸司職掌」と正徳『大明會典』の工部の記述から、國家としての基本規定の展開を確認し、さらに上供品を割り付けされた各地方の狀況を地方志の記述から検討する。國家全體としては北京遷都によつて物品割り當てに變化が見られる。野味は祭祀に使用されるため、宗廟と明太祖陵が存在した南京を中心に考えられ大きな變更はなかった。一方皮張・翎毛は全體に負擔の増加が見られ、翎毛に關しては長江流域を負擔體系

の中心とするようになったという。

また各地での物品負擔の實態がどうであったのか、地域ごとに分けて地方志に残る物品の種類や數量の記述に注目しその傾向を詳細に分析する。その中で明代中期は歲進・歲辦・歲造物品の銀納化の事例が見られるようになる。なぜ銀納化がなされたのか、例えば成化年間に施行された徭役制度の改革の影響がある。また華北諸省のように資源枯渇の事態が生じていたことも理由として考えられる。さらに物品上納に際して宦官が介在することにより不正が行われ宦官が私腹を肥やすという問題も発生していた。以上から明代の進貢制度はむしろ複雑化し、その名目も増加して過大過重になったとする。

○第七章 明代前期における河泊所と魚課——江南河川資源の流通構造について——

本章では河川資源の流通構造に關心を置いて、魚網・魚船・魚標の所有高を基準に魚戸に課せられる税金である魚課を徵收對象とする機關・河泊所に注目する。明代前半において河泊所は特定の地方における在外府州縣の所屬衙門の一つであり、巡檢司・稅課司と同等或いはさらに下部に位置する末端の徵稅機關であった。この河泊所と徵收する魚課について、本章では各地方志の記述から長江流域を中心にその實態を明らかにする。河泊所は元制にはなく洪武年間に長江流域、特に南直隸・江西・湖北に集中して設置された最末端の地方行政機關である。通常の夏秋の兩稅及び商稅・關稅とは異なる水產資源に關する稅收であり、これまで史料が零細なこともあり研究意義は低く見られがちで、その詳細はさほど明らかにはされてこなかった。

魚課徵收については、本色として魚油等現物納入はもちろんであったが、時代が下るにつれ代替品による折色あるいは銀納化が進んだ。嘉靖期には納入すべき現物の數量が記されるものの、實際には銀納或いは他貨幣による折納は相當進んでいたようである。地域によっては現物納入が續けられる例も見られるが、現物また代替物品の不足もあったようである。

一五世紀から一六世紀、成化弘治年間から正徳嘉靖年間に、長江流域江南地方を中心に農業生産における商品作物の栽培や商品生産の展開による著しい經濟成長が見られるが、一方で徵稅機關たる河泊所や稅課局等は各所屬州縣に統合または廢止の傾向にあった。そこには均徭法・一條鞭法等明後半の賦役制度或いは行政の改革が背景としてあったと考えられる。

○第八章 明代地方志に見る商稅・課程の地域史研究

商業流通の發達に伴ってそこから徵收される商稅は、宋代以降國庫財政或いは地方財政において非常に大きな比重を占めるようになった。本章では明代の商稅制度そのものではなく、課稅と徵收の實態や各地域ごとの特徴を地方志の記述から追うものである。特に當時商稅の範疇と見なされた魚課・鹽課・茶課等の課程徵收に注目している。

華北・華中・華南と大きく三つに分けて課程徵收の特色を見ているが、華中は特に長江流域を中心とした地方志を重點的に検討しており、課程項目の種類の多さに經濟發展の著しさが窺える。

○第九章 明代地方志物產貨之屬の研究

中國地方志では當該地の各種特產品を取り上げて、土産ないしは物產として項目を立て列擧している。さらにその中でも「貨之

屬」という項目に分類される物品に注目するのが本章である。比較対象として宋元代地方志の土産・物産の項の記述をまず分析した上で、明代地方志における記述を華北・華中・華南そしてさらに西南地域に分け、貨之屬に挙げられる物品の各地域における特徴や分類傾向等を検討している。

それを通して各地での木材或いは礦物資源の産出状況や商品作物・名産品等の品目の變動、長江と大運河の水運を中心とする交通網を基盤とした商品流通の實態を浮かび上がらせている。また宋元代と比較し關連させることで、明代に至って物産の品目や數量の變化のあることも見えてくる。

〈後編〉 長江・大運河流通の展開と巨大都市連鎖の形成

後編では前編の検討結果を踏まえ、明代に至り商品經濟の全國的展開が見られる一方、舊來の金屬資源また木材資源等の自然資源の枯渇狀態も明らかであり、この上は内陸未開の地である西南中國に活路を求めるしかない状況にあったと結論づけた上で、西南中國に焦點を絞って論述する。さらに西南から全國へと繋がる重要な交通手段であった長江・大運河水運に注目し、その流通システムと流域に形成された巨大都市の發展に迫る。

○第一章 明代、雲南・貴州兩省の成立

西南中國の中心地域である雲南省・貴州省兩省の成立について述べている。兩地域とも古來少数民族の天地であったが、それぞれの辿った歴史には違いがある。雲南は古代から順に滇國、南詔國、大理國という少数民族國家の支配が続いた地であり、貴州は漢代に西南夷と稱されたが武帝の南越國侵攻の折から漢族との交渉を深め、以降形式的とはいえ漢人支配が進んだ地である。元朝

支配が始まるとそれぞれ體制は大きく變化し、大理國はフビライの侵攻を受けて滅亡し雲南行省が置かれ、貴州の州縣は湖廣行省の管轄に入った。さらに明代にはそれぞれ雲南布政使司・貴州布政使司が設置され、管轄州縣の範圍がより明確に規定され漢人支配は強められた。本章では兩地域の行政システムの在り方について、まず中央政府の直接支配が本格的に開始される元代の状況を概観する。これを前提として、明太祖による雲南・貴州布政使司設置と兩地域の地方行政システムの整備について述べている。

明代の雲南・貴州兩省は元代と比較して、土司土官は依然存在するものの府州縣制による地方行政の規模は飛躍的に擴大している。一方で農民支配の根幹である里甲制の規模は小さく、必ずしも漢人支配による内地化が格段に進展したわけではないとする。ただ明代後期には内地同様に里甲制の弊害も見られ、それこそが雲南・貴州兩地域の中國化の一端を示していると述べている。

○第二章 明代、長江・大運河水運の流通構造

長江と大運河による水運流通は、隋煬帝の大運河建造以來、江南の米穀を主要な輸送對象とし漕運制度の整備がなされることで發達してきたといえる。しかし明代に至り兩稅・徭役ともに銀納化が圖られる中で、漕運制度は明後期には大きく變更されざるを得なかった。ただ前編で見たように、各地で負擔された歲進・歲辦・歲造や魚課・課程、各貢納物品のすべてが銀納化されたわけではなく、また江南デルタ地域に流通のすべてが集中していなかったことも確かである。本章では長江・大運河水運の流通構造の研究は果たして漕運制度に集約されるのかという疑問から、江南デルタの一地域にこだわらない姿勢で、改めてそこに關連する収

取體系の諸問題を取り上げている。

前編第七章の河泊所と魚課、第八章の課程の検討からも言えることであるが、長江・大運河流域では様々な特別課税があった。特にここで注目するのは水運輸送される多様な物品に課税がなされたことである。明代中期以降の中國全體の商品作物の栽培・採取、さらに各種原料による商品生産の展開を基盤とした流通構造の發展により、銀納化が進んでいったが、徴收體系そのものは維持され続けた。

ただ當時社會經濟は發展の一邊倒だったのではなく、人民の生活に必要な金・銀・銅・鐵等の礦物資源が全國的に枯渇状態であった。地方志の記述から各地の礦物資源採掘に關する課税は、生産量の減少により民への負擔を重くし、稅徵收もその額面から微々たるものになっていったのがわかる。

本章第二節では長江・大運河流域に關わる物資として木材の採取を取り上げ、北京遷都以後における宮城建築用材の調達について、『明史』食貨志・採木の記述を元に當時の状況を明らかにする。これによれば、北京宮城建築の折つまり永樂年間にはすでに北京周邊での木材調達は難しく、木材搬出には水運が必須條件であることから、長江流域の江西・湖廣さらに四川へと手が伸ばされた。さらに宣德年間以降には四川を中心とする西南の遠隔地が木材供給の重要地となった。第三節では『船政新書』から船隻用材の調達にも言及している。

本章では明代において礦物や木材等の需要の高い資源が、舊來の原産地から姿を消す一方で、長江・大運河流域構造の發展を背景に四川・貴州といった西南の奥地へ資源を求めざるを得なかつ

たことを改めて主張する。

○ 第四章 清、乾隆期雲南銅の京運問題

明代における礦物をはじめとする各種資源の枯渇状況を經て、續く清代ではどのような傾向が見られたのかという視點から、第三章及び第四章では制錢鑄造に不可欠な原料たる銅の生産と輸送體制について中心的に検討している。第三章は第四章の内容を前提として展開されるので（第四章の元となる初出論文が第三章内容より以前に發表されているため）、論の流れを理解しやすくするため、第四章の概要から述べておきたい。

本章では、清初から康熙・雍正期に主たる銅供給源であった日本銅（洋銅）の輸入減少を機に、その代替として登場した國內産銅・雲南銅の生産状況と北京への輸送（京運）規定、京運の實態について、具體的數値とそれを表化することにより詳細に検討したものである。結論にも述べられているが、從來の雲南銅の研究は貨幣史或いは産業としての鐵業史の觀點から議論されてきたが、ここでは雲南銅の生産規模と京師までの輸送問題、特に後者に重きを置き、東西を結ぶ長江水運ルート的重要性を浮かび上げさせた點に特徴がある。

中心的に扱われる史料としては、まず『銅政便覽』が挙げられる。ここから雲南銅の產出額がピークを迎える乾隆期において、各銅廠の概況・經費變動・給價銀の變遷等を一覽にして、當時の雲南銅の生産構造を明らかにしている。さらに雲南の各銅廠から京師まで長江・大運河水運ルートをどのように輸送されたのか、政府により規定されたその道程と輸送に費やす日數、掛かる諸經費等を具體的數値を擧げて再現している。また皇帝と地方官僚の

間で交わされた奏摺の中から、雲南銅輸送に關して管轄地域内を輸送船隻が通過したこと等を報告する文書を取り上げ、部分的ではあるが輸送實態に迫っている。多数存在するこれら乾隆期における銅他礦物資源の京運報告の奏摺は、章末に一覽表としてまとめられており、さらなる分析が期待できる成果となっている。

○ 第三章 清、乾隆『欽定戸部鼓鑄則例』に見える雲南銅の京運規定

本章では第四章の成果を受けて、そこでは得られなかった同時代史料として新たに乾隆期の『欽定戸部鼓鑄則例』を取り上げ、『銅政便覽』の記述とリンクさせながらさらに雲南銅京運の實態に近づこうとしている。『銅政便覽』では理解できなかった京運費用や輸送船隻の雇募、輸送中の水難事故への對應等の詳細を確認することができ、より詳細に雲南銅輸送に關わる諸問題を明らかにしている。

○ 第五章 清、乾隆初年雲南銅の長江輸送と都市漢口

本章では乾隆三年に京師錢局で使用する銅を洋銅から雲南銅に全面的にシフトすることによって開始する清朝銅政策の新たな展開と、雲南銅京運に附隨してにわかに注目される長江中流域の主要市鎮・漢口を取り上げている。

『清實錄』或いは『上諭檔』の記述から、乾隆初年に銅政策において日本から雲南へと銅供給地が一大轉換されたことだけでなく、錢法上においてもいくつかの問題が存在したこと、また当面重視すべきと認識されていたのは雲南銅京運の諸問題、つまり長江水運システムの改善にあったことを指摘している。またその水運システムの構築の中で、兩淮鹽の販賣據點として、また下流デ

ルタへ向けた米穀等諸物流の據點としてすでに發展しつつあった漢口が、雲南銅京運という國家主導の物流形成によってその都市としての地位を高められ、文化的にも成長し始めていたことを述べている。

○ 第六章 中國近世、巨大都市漢口と『漢口叢談』

本章では第五章で觸れた漢口について、さらに掘り下げる内容となっている。道光初年に刊行された『漢口叢談』を分析することにより、中國四大鎮の一つにも擧げられるようになった、明末清初からアヘン戦争以前までの長江流域に發展した巨大都市漢口の様子を再現することを試みている。近代の漢口については、一八五八年天津條約による開港以來、内陸にも關わらず大型船が多数往來し上海に次ぐ第二の港として發展、湖廣總督張之洞の洋務近代化により近代工業都市としても重要地となった。本章はその基盤となった近世都市漢口の姿に迫ろうとするものである。

『漢口叢談』は漢口に居住した經驗を持つ文人・范鎔によって著述された筆記史料で、漢口の人々による内側からの證言を表したものと見える。その住民の肉聲をもとに、まず漢口市街の區畫や建物群について詳細に見ており、佛教・道教の宗教施設や漢口が四通八達の地であったことを示す會館・公所等がリストアップされている。また漢口鎮の成立に關わる記述を集め、その地理環境や都市景觀について具體化している。さらにその地域行政の在り方、漢口鎮内の宗教施設及びそこを據點として各地の商人が繰り廣げた商業活動について、そして『漢口叢談』に登場する人物群像を取り上げ、多角的に漢口の都市像を描いている。長江・漢水等河川交通の盛況を背景に、一八世紀乾隆期には五方雜居の巨

大な移住民社會が存在したことを示している。

○第七章 長江・大運河流通と巨大都市連鎖の形成

第五章・第六章で考察した漢口に加えて、同様に明代に基礎が作られ清代特に一八世紀には大都市として發展していた、重慶・蕪湖・天津を取り上げている。その近世における都市沿革を確認した上で、各都市が一八世紀にわかに獨立して勃興したわけではなく、雲南銅の開発とその京運が重視されたこと、さらに中國全土の物産流通と商人の活躍等と相俟って、長江・大運河流通網が活況を呈し流域都市の連鎖的發展に貢献したと述べている。

以上に結語を加えたものが本書の内容である。

各章の細部にわたる問題點の指摘は省略させていただきたい。

ただ後編については本書の特色がよく表れている部分であり、川勝氏の眞骨頂たる内容と思われるので、後編の展開を中心として個人的に氣づいた點をいくつか指摘しておきたい。

前編において全般的な戸口統計や物品流通、その銀納化或いは課税化の實態を隈無く調査したことによって、結論として資源枯渇の状況が見えてきたことは、後編の展開に關して特に重要である。必要物品、中でも礦物資源の不足分をどこで補填するか、その問題を解決するためにわかに注目を浴びるのが西南中國なのである。

これまで西南中國は内陸の邊境地また少數民族の寶庫といった認識が強く、中國近世の社會經濟史上では長江下流に比較して後進地と見なされ、研究對象として大きく取り上げられることはなかった。しかし乾隆期以降制錢鑄造等に用いられ、社會經濟の大きな鍵を握ることになる雲南銅の登場により、表舞臺に急浮上し

てくるのである。またそれ以前の雍正期には、それまでの西南中國で支配的であった土司制度が改められ、中央から派遣される流官による支配が本格化した「改土歸流」が大規模に實施されたことも見過ごせない。これを機に漢人が多數入植、西南中國の内地化は加速し、雲南銅生産の發展にもつながるのである。その發展の規模において江南デルタの比ではないが、この時代内陸西南の地でも社會經濟の勃興が存在していたことは、川勝氏の論によっても十分示されているところである。西南中國は清代におけるフロンティアとして開發され發展する途上にあった。

さらに川勝氏は雲南銅京運のメインルートでもあった、長江・大運河の東西南北へ廣がる流通システムに着目した。この近世の主要水運流通については、漕運との關係から問題にされることが多く、一般の物流状況についてはあまり明らかにされていないのが現状であろう。特に今回具體的に雲南銅の京運實態を明らかにしたことで、水運流通の新たな一面を見ることができたことは、本書の大きな成果である。また一八世紀雲南銅を代表とする長江・大運河を利用した物流の發展と、從來各地方都市として個別の研究しなかった流域都市の發展を、「連鎖」という發想で結びつけ巨大都市の全國規模での展開を想定したことに大きな意義がある。

ただその研究及び著述方法において、全體の論旨の理解を深めるため、氣をつけねばならない部分があるように思う。まず前編において地方志の記述を多用していることである。全國的に調査の手を廣げ網羅的に事例を収集しており、それ自體が史料集的作用を果たす一方で、各論の中で焦點がどこにあるのか失念しやす

く散漫になっている。個々の地域の状況は理解できるが、それがどのように全體として有機的に結びついていくのか、或いはバラバラなのか、それぞれの關係性が見出せない。また地方志の場合末端行政の實態をかいま見ることができ、各地の特色が明らかに一方で、このように多數の地域に跨って検討する場合記述に統一性が無く、また著者の恣意的な記述なども考慮せねばならず、單純な比較検討は難しいと思われる。この點を踏まえた上で、論を讀み進めるべきであろう。

本書全體を通して言えることであるが、川勝氏は多くの史料を丹念に分析しており、その史料そのものによって、または表形式に整理し、その上で研究成果を語らせるスタイルをとっている。史料の記述そのものから證明できる事實も多いが、一見すると理解しにくく史料の羅列になってしまいがちである。氏には今少し説明の補完をお願いしたい。また讀者には勞苦を厭わず丁寧に史料を讀むことをお勧めする。

最後に筆者の残念に思うところは、後編末の長江・大運河流通システムとそれに連動して流域に巨大都市が出現するという件に至って、少々説得力に缺ける印象が否めない點である。というのも、漢口については『漢口叢談』の分析からある程度の實態が具體的に明らかにされたが、同時期に發展する重慶や天津等他の都市については簡単に觸れるにとどまり、十分な事例が示されていないからである。都市の發展が連鎖していったとするならば、發展理由の共通性や個々の發展状況の詳細を示すことで、長江・大

運河流通によって繋がり合う必然性と特色をより明らかにしてほしい。川勝氏の跋によれば別途天津史研究の蓄積も持ちのようであり、また都市に付きものの會館・公所やそこに集う各種商人・職人について、各地に残された石碑文等の分析もますます必要と感じておられるようなので、今後より研究を進められ、長江・大運河流通に伴う巨大都市連鎖の理論の成熟を期待したい。冒頭にも觸れたように、川勝氏自身がこれまでの江南デルタ地域へのこだわりを捨てていること、一地域に特化しない姿勢は重要である。これまでの研究成果を元に、全国的に分析の手を廣げ普遍化しようという作業に着手している。江南デルタの研究蓄積に比較すれば、まだまだ研究の手が及んでいない地域は多く残されている。すでに重鎮として名高い川勝氏の本書に見られるような飽くなき探求心は、他の研究者にも大いに刺激を與えるであろう。

最後に、經驗不足な若輩者の評者にとって本書の書評はいささか荷が重いものであった。豊富な内容と研究成果を擁する本書について、著者の意圖するところを正確に汲み取れたか否かは自信がない。誤解・誤讀も多いかもしれない。十分な檢證と評價を與えられなかったことを、川勝氏並びに讀者にお詫びする次第である。今後評者の一層の努力をお約束し、また川勝氏のご研究のさらなる飛躍を祈念して結びとしたい。

二〇〇九年二月 東京 汲古書院
B五判 七〇七頁 一五〇〇圓